様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 13 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2008　～2010
課題番号：20390570
研究課題名（和文）要介護高齢者の予後と在宅継続に関連する家族の役割に関する縦断研究

研究課題名（英文）　Prognosis of old people using long-term care in the community and relating it to their family caregivers' role

研究代表者
伊藤　美樹子　（ITO MIKIKO）
大阪大学・大学院医学系研究科・准教授
研究者番号：80294099

研究成果の概要（和文）：
東大阪市において 2006 年から 2008 年の間の在宅継続者における要介護高齢者の要介護度は７割が悪化していた。また 2005 年から３年で褥瘡有病率は全体で 5%から 10%へと増加した。家族介護者の内訳は娘が 3 割で、妻、夫、息子の妻が各 2 割程度，息子が１割であり、娘が経年的に介護負担感を強く感じていた。妻介護者はサービスに頼らず私的に介護する態度がみられた。2005 年から３年間で夫の３割は介護役割を誰かと交代したのに対し、妻のほとんどは交代せず介護に従事していた。

研究成果の概要（英文）：
Seventy percent of community-dwelling older people using long-term care insurance services showed care level worse from 2006 to 2008. It was also increasing that prevalence of pressure ulcer from 4.9% to 10.7% during three years from 2005. Composition of family caregiver was 30% of daughter, 10% of son and 20% of husband, wife, and daughter in low, respectively. Daughter showed significantly more care burden after three years. Wives valued their providing care better and preferred not to use long-term care services. Most of the wife was not alternatively and was engaged in caregiving while 30 percent of the husband had alternated the caregiving role for three years from 2005.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2009 年度	2,600,000	780,000	3,380,000
2010 年度	2,800,000	840,000	3,640,000
総　計	8,200,000	2,460,000	10,660,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・地域老年看護学
キーワード：要介護高齢者，在宅介護、家族介護

1．研究開始当初の背景

2000 年に施行された介護保険制度は、2006 年には、介護予防を重視し、要介護者に対する在宅重視の自立支援へと転換を図った。一方で、本邦の世界トップ水準の平均寿命、配偶介護者の増加は、家族介護者の年齢を高めており、介護者自身の生き甲斐、社会参加、自己実現が達成されることもまた重要な課題となっている。一方で、介護の性や要介護者との続柄によって肯定的認識や否定的認識、あるいは介護の継続意志が介護者の続柄によって異なることや、身体介護を行う割合や介護時間の長さなどにおいて女性の方がストレッサーが高いことが報告されており、介護者の多様性を踏まえる必要がある。またこれらの知見は少ないサンプルや横断研究によるものがほとんどであると言う限界があった。そこで、本研究では介護保険者の大規模サンプルを用いた縦断調査によって、要介護者の予後と介護者の状況を把握し、その分析において家族介護者の属性による検討を加えることを目的とした。

２．研究の目的

東大阪市において要介護高齢者の要介護度の予後と在宅生活の継続有無に対して、家族がどのように関与しているのかを統計調査と質的調査を有機的に組み合わせた方法論的トライアンギュレーションを用いて明らかにし、要介護高齢者の社会的参加ならびに社会的介護が推進される時代が求める家族介護の役割や要介護高齢者とその家族の共生的なあり方を考察する。

3．研究の方法

（１）要介護者とその家族に対する質問紙調査ならびに要介護度予後分析

2008 年８月に大阪府東大阪市に在住し，要支援・要介護認定を受け，ケアプランを作成していた要介護者 12,570 人を要介護度別に層化し，無作為に抽出した 3,808 人を調査対象者とした（要介護度別抽出割合 29～34%）．調査対象者世帯へは要介護者用，介護者用の無記名自記式質問紙を郵送により配布・回収した。また要介護度予後の分析については、本調査実施に関連して高齢介護課より提供を受けた匿名データ（要介護度、居宅介護サービス利用実績等）を用いた。調査は大阪大学医学部保健学倫理委員会の承認を得た。調査期間は 2008 年 11 月 1 日～2009 年 1 月 9 日で、回収数は 2035 件（53.4%）であった。このうち 1016 件に家族介護者が存在し、内訳で多かった夫介護者 152 件（16.4%）、妻介護者 191 件（20.6%）、娘介護者 298 件（32.1%）、息子の妻介護者 161 件(17.3%)、息子介護者 126 件（13.6%）の計 928 件を分析対象とした。縦断的な分析は、すでに同様の方法で 2005 年に実施した質問紙調査データとリンケージ可能であった 308 世帯で行った。

（２）家族介護者へのインタビュー調査

対象者は東大阪在住の家族介護者で、続柄が多様になるよう東大阪市内の居宅介護事業所に調査協力依頼を行い、調査協力の得られた 17 事業所を通じて、調査協力の同意を得た家族介護者に対してインタビューを実施した。研究参加の同意は自由意思に基づき書面にて確認した。調査は大阪大学医学部保健学倫理委員会の承認を得た。インタビューの対象者は介護保険利用している独居の高齢者 6 名、家族介護者 22 名であった。独居者は、介護保険サービス利用の実際や態度を家族介護者と比較するためにサンプリングした。調査は、2009 年の 10 月～2011 年の 3 月までで自宅への訪問面接調査を行った。

４．研究成果

（１）要介護者の状況

①要介護度予後

2008 年 10 月に大阪府東大阪市に在住し，要支援・要介護認定を受けていた要介護者 12,570 人を要介護度別に層化無作為抽出し

た 3,808 人の内，2006 年 4 月以降に連続して 12 カ月以上認定を受けた要支援 1～要介護 2 の 65 歳以上高齢者 522 人を分析対象とした。追跡期間中の 3 カ月毎の多時点の要介護度の推移（3 群：改善・維持，改善と悪化，悪化）の 3 群に分け，「改善と悪化」は追跡前後の 2 時点評価（改善・維持，悪化）を加味し，「維持・改善」「改善と悪化：維持・改善」「改善と悪化：悪化」「悪化」の 4 群に分類した（以下，時系列変化とする）。基本属性（性，年齢，追跡開始時の要介護度）による特徴を把握した．要介護度が改訂された 2006 年から 2008 年の要介護度の変化回数を見ると要介護度の時系列変化は「維持・改善」群 15.1%，「改善と悪化：維持・改善」群 13.0%，「改善と悪化：悪化」群 14.0%，「悪化」群 57.9%で，要介護度の時系列変化の群別の分布，追跡開始時点の要介護度に性差はなかった。
また追跡期間中の要介護度変化域，追跡開始前後の 2 時点の要介護度変化量，要介護度の変化回数においても性差は認められなかった。変化回数別では 0.48-2.59 回変化しており、このうち 2 回以上の複数回の変化を経験した者は 45%であった。要介護度の悪化の経過には性差はなかったが、男性の方が女性よりも早期にその変動が始まることが明らかとなった。

②褥瘡有病率の変化

褥瘡の発生を在宅介護の包括的な「質」を表すものとして、2005 年から 2008 年の 3 年間の在宅生活を継続していた要介護者 308 人の 2005 年と 2008 年の要介護度別の褥瘡有病率を分析した。全体では褥瘡有病率は 2005 年の 4.9%から 2008 年の 10.7%へと増加した。要介護度別では、要介護度 5 が 29.4%, 33.3%と最も高かったが、有病者の増加割合が最も高かったのは要介護度 3 の 4.4%から 10.3%であった。

（2）介護者の状況

①2008 年の介護者の状況

介護者は、娘が 3 割で、妻、夫、息子の妻が 2 割程度であった。

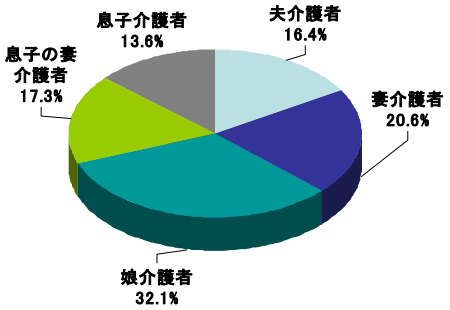

図 1　主たる家族介護者の続柄別の割合

表 1　介護者の続柄別にみた介護状況

	夫介護者	妻介護者	娘介護者	息子介護者	息子の妻介護者
介護者年齢(Mean±SD)	78.9±6.7	72.8±7.2	56.7±8.2	57.2±8.9	57.2±7.1
介護者就労あり(%)	8.5	11.5	44.6	63.8	52.6
世帯収入:300万円未満(%)	66.4	79.2	71.9	71.3	46.7
副介護者なし(%)	11.6	15.4	13.9	8.6	3.9
介護保険サービス利用率(%)					
ホームヘルプ	62.5	47.1	55.4	71.4	46.0
デイケア・デイサービス	27.6	34.0	44.0	42.1	48.4
ショートステイ	3.3	8.4	13.8	3.2	16.1

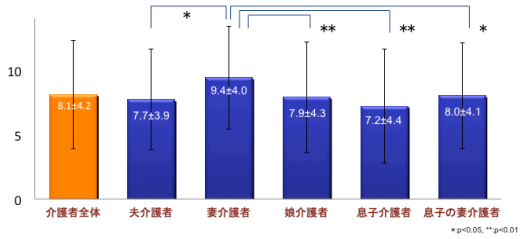

図 2　介護者の続柄別にみたうつ得点

介護者全体のうつ的症状の得点は、8.1±4.2 点（score range: 0-24）で、続柄別にみると、妻介護者の得点のみ有意に高かった。また妻介護者へのインタビューでは、在宅介護継続への強い意欲とともに「要介護者が自分以外の介護をうけつけない」「自分の方がよい介護ができる」「介護は、自分自身が納得するためにしていて、自分自身の務めと思っている」など特徴的な説明がみられた。また高齢世帯では、居宅介護サービスの利用額が抑制される傾向があることとも併せて考えると、介護を「私的」に行う傾向が強く表れた。息子介護者では就労していることがうつ

得点を低めていた。夫介護者では平均介護時間が長いこととうつ症状の高さが関連していた。娘介護者については、介護負担感で特徴がみられ、経年的に介護負担感の点数が有意に悪化していた。年齢別の検討では、50 歳代に同様の点数の悪化が見られ、娘介護者の平均年齢（56 歳）を考慮すると、娘介護者は介護継続に対して負担を感じやすいと考えられる。

②介護継続の状況

在宅介護を継続している要介護者の介護者が継続して介護をしているかどうかを介護者の同一性や交代の状況を 2005 年調査結果と 2008 年調査とをリンケージし 308 世帯を分析した。介護者の平均年齢 62.4±11.7 歳（2005 年時点）で、女性が約 7 割、介護者の内訳は、娘（32.0%）、妻（18.5%）、息子の妻（17.4%）、息子（12.6%）であった。夫介護者、息子の妻介護者は交代しやすく、妻と娘はほとんど交代していなかった。介護者交代の有無別では要介護者の要介護度が低い方が交代割合は高かった。年齢、婚姻状況、就労や副介護者の有無等では関連がみられなかった。

男性介護者数は増加傾向にあるが、縦断分析を行なうと、妻、娘介護者が主たる介護役割を継続して実施していることが明らかになった。

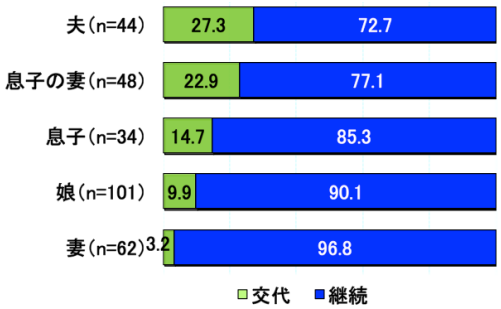

図３　2005年から2008年の家族介護者の「主たる介護者」役割の継続状況

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）

①杉浦圭子、伊藤美樹子、九津見雅美、三上洋：在宅介護継続配偶者介護者における介護経験と精神的健康状態との因果関係の性差の検討. 日本公衆衛生雑誌、査読有、57（１）、2010、3-16

②Keiko SUGIURA, Mikiko ITO and Hiroshi MIKAMI: Gender differences in Spousal Caregiving in Japan. Journal of Gerontology: Social Science, 査読有, 64B(1), 2009, 147-156

〔学会発表〕（計　23 件）

① Yumi FUJIKAWA, Kayoko OMURA, Tomoyo HISHIDA, Kazue SAKAKIBARA, Mikiko ITO, Hiroshi MIKAMI: The prognosis of cognitive function in impaired old people without cognitive disorder dwelling in community. 14th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS), 2011.2.12, Seoul Olympic Parktel, Seoul, Korea

②Kazue Sakakibara, Tomoyo Hishida, Yumi Fujikawa, Kayoko Omura, Mikiko Ito, Hiroshi Mikami: Utilization of Long-Term Care Insurance Services for Impaired old People by Living Arrangements. 14th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS), 2011.2.12, Seoul Olympic Parktel, Seoul, Korea

③ Tomoyo Hishida, Kayoko Omura, Kazue Sakakibara, Yumi Fujikawa, Mikiko Ito, Hiroshi Mikami: Surviving 5 Years As Impaired Old People Using The Long-Term-Care In Home Care Settings And Its Relation With Psychosocial Factors. 14th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS), 2011.2.11, Seoul Olympic Parktel, Seoul, Korea

④大村佳代子、菱田知代、藤川祐未、伊藤美樹子、三上洋：在宅療養者の褥瘡有床率と関

連する家族介護者のケア要因．第69回日本公衆衛生学会総会、2010.10.28、東京国際フォーラム

⑤菱田知代、大村佳代子、藤川祐未、伊藤美樹子、三上洋：地域在住要介護高齢者の要介護度の時系列変化と性差．第 69 回日本公衆衛生学会総会、2010.10.28、東京国際フォーラム

⑥杉浦圭子、伊藤美樹子、九津見雅美、菱田知代、磯野安理沙、三上洋：居宅介護保険サービス利用者の介護者のうつ的症状の続柄別の検討．第52回日本老年医学会学術集会・総会、2010.6.26、神戸商工会議所

⑦杉浦圭子、伊藤美樹子、九津見雅美、三上洋：介護保険サービス利用者の介護者交代に関わる要因の検討．第68回日本公衆衛生学会総会、2009.11.22、奈良

⑧大村佳代子、菱田知代、九津見雅美、杉浦圭子、伊藤美樹子、三上　洋：在宅要介護者における褥瘡有病率と介護状況との関連．第68回日本公衆衛生学会総会、2009.11.22、奈良

⑨菱田知代、磯野安理沙、九津見雅美、杉浦圭子、伊藤美樹子、三上　洋：居宅介護サービスを利用する家族介護者の介護ストレス対処法略の特徴と変化に関する研究．第68回日本公衆衛生学会総会、2009.11.22、奈良

⑩Keiko SUGIURA, Masami KUTSUMI, Hiroshi MIKAMI, Kayoko Omura, Tomoyo HISHIDA, Mikiko ITO: Effects of employment on male family caregivers' mental health ---a comparison between sons and husbands---. The 4th International conference of community health nursing research, 2009.8.18, Adelaide, Australia

⑪Masami KUTSUMI, Mikiko ITO , Tomoyo HISHIDA, Ka yoko Omura, Keiko SUGIURA, Hiroshi MIKAMI: Prognosis of older people dwelling in community 1: Five -year survival analysis for older people using long-term care. The 4th International conference of community health nursing research, 2009.8.17, Adelaide, Australia

⑫Tomoyo HISHIDA, Mikiko ITO , Masami KUTSUMI, Keiko SUGIURA, Kayoko Omura, Hiroshi MIKAMI: Prognosis of older people dwelling in community 2: Three -year survive and its affecting psychological and Social factors. The 4th International conference of community health nursing research, 2009.8.17, Adelaide, Australia

⑬Mikiko ITO Tomoyo HISHIDA, Kayoko OMURA Masami, KUTSUMI, Keiko SUGIURA, Hiroshi MIKAMI: Social support use and Dependency among old people by Living arrangements. The 4th International co nference of community health nursing research, 2009.8.17, Adelaide, Australia

⑭九津見雅美、杉浦圭子、菱田知代、大村佳代子、伊藤美樹子、三上洋：東大阪市の居宅介護サービス利用者追跡調査　第２報：認知障害該当状況とその特徴．第67回日本公衆衛生学会総会，2008.11.6，福岡国際会議場

⑮杉浦圭子、九津見雅美、伊藤美樹子、大村佳代子、菱田知代、三上洋：東大阪市の居宅介護サービス利用者追跡調査　第３報：介護負担感の変化．第67回日本公衆衛生学会総会，2008.11.6，福岡国際会議場

⑯菱田知代、大村佳代子、杉浦圭子、九津見雅美、伊藤美樹子、三上洋：東大阪市の居宅介護サービス利用者追跡調査　第４報：介護者のうつ気分と介護肯定感．第67回日本公衆衛生学会総会，2008.11.6，福岡国際会議場

⑰大村佳代子、菱田知代、杉浦圭子、九津見雅美、伊藤美樹子、三上洋：東大阪市の居宅介護サービス利用者追跡調査　第５報：利用者負担額の変化に関する検討．第67回日本公衆衛生学会総会，2008.11.6，福岡国際会議場

⑱伊藤美樹子、杉浦圭子、九津見雅美、大村佳代子、菱田知代、三上洋：東大阪市の居宅介護サービス利用者追跡調査　第１報：調査概要と要介護者予後．第67回日本公衆衛生学会総会，2008.11.6，福岡国際会議場

⑲伊藤美樹子、九津見雅美、杉浦圭子、三上洋：在宅介護サービス利用下での子世代介護者における続柄別の介護経験の特徴．第34回日本看護研究学会学術集会，2008.8.20，神戸国際会議場

［その他］　（計　３件）
①三上洋、伊藤美樹子、磯野安理沙、榊原一恵、菱田知代、杉浦圭子：居宅介護サービスの利用と家族介護に関するインタビュー調査報告書．2011.3

②三上洋、伊藤美樹子、杉浦圭子、九津見雅美、菱田知世、磯野安理沙、大村佳代子：東大阪市における居宅介護サービス利用者に関する調査．2009.3

③伊藤美樹子：「東大阪市における居宅介護サービスの利用に関する調査研究」研究成果のブース展示：第 67 回日本公衆衛生学会総会，2008.11.6

６．研究組織

(1)研究代表者
伊藤　美樹子（ITO MIKIKO）
大阪大学・大学院医学系研究科・准教授
研究者番号：80294099

(2)研究分担者
三上　洋（MIKAMI HIROSHI）
大阪大学・大学院医学系研究科・教授
研究者番号：80173996

(3)連携研究者
九津見雅美（KUTSUMI MASAMI）
千里金蘭大学・看護学部・講師
研究者番号：60549583
（H21 年から連携研究者として参画）

菱田知代（HISHIDA TOMOYO）
千里金蘭大学・看護学部・助教
研究者番号：40402705
（H22 年から連携研究者として参画）